弁護士　田中 秀雄

今回はシルバー弁護士の独り言として、最近読んだ本や見た映画について書こうと思う。

■「まほろ駅前シリーズ」「木暮荘物語」

「あぁ、私はこの本が好きだ」と言えるのは、今は「まほろ駅前多田便利軒」「まほろ駅前番外地」「まほろ駅前狂騒曲」「木暮荘物語」の4冊だ。読み終わった時、この後何を楽しみに生きていったらいいのか喪失感に襲われたほどだ。4冊とも女流作家の三浦しをんさんの作品である。三浦さんは29歳の時、「まほろ駅前多田便利軒」で直木賞を受賞している。現在まだ38歳であるが、どうしてこの若さでこのような巧みに小説が書けるのかと思うほど上手い。上手すぎる。彼女の小説は文学と呼ぶにはあまりにも面白くて、読み物と呼ぶにはあまりにも深く迫っている。

■「まほろ駅前多田便利軒」

まほろ市は東京のはずれに位置する東京都南西部最大の町。駅前で便利屋を営む多田啓介のもとに高校時代の同級生の行天春彦が転がりこんで、その後2人は便利屋と助手のコンビとなる。舞い込む仕事は犬の飼い主探しだったり、小学生の通塾の送迎だったり、女性の恋人のふりだったり。ところが、決まってヤクザがらみの厄介事に巻きこまれて綱渡りをする羽目になる。責任感が強く他人を放っておけない性格から客の依頼だけでなくその人の人生まで背負ってしまう多田とマイペースで風来坊、喧嘩にはめっぽう強い行天は正反対なようで相通じるものがあるようだ。2人ともに離婚歴があり子をもうけたが、多田は子を亡くしており、2人とも心に傷を負っている。

■「木暮荘物語」

小田急沿線世田谷代田駅から徒歩5分。住宅街に建つ古びた2階建て木造アパート「木暮荘」には4人の住人がいる。1階に住む大家の木暮さんは70歳過ぎの男性だが死ぬ前にもう一度性交渉をしたいと願っている。その隣のいかにも今時の女子大生光子の部屋には複数の男友達が出入りしている。光子の生活を2階からこっそりのぞいている感じの悪いサラリーマンの神崎。今彼と元彼と3人で奇妙な共同生活をすることになる花屋の店員の繭も2階の住人である。この4人を中心にさらにいろいろな登場人物が現れ、物語はくっついたり離れたりしながら進んでいく。1人1人魅力的な登場人物達が、恋愛や性の問題を抱えながら真摯に誠実に他人との関わりを求めている。

■映画「まほろ駅前狂騒曲」

映画が好きで昔はよく見たが、この頃は年に2、3本しか行かない。昨年暮れに久しぶりにみたのが「まほろ駅前狂騒曲」である。監督は大森立嗣（俳優大森南朋の兄で映画「さよなら渓谷」等で注目されている）。「まほろ駅前シリーズ」は2001年に大森監督で「まほろ駅前多田便利軒」が映画化され、その後TVドラマで「まほろ駅前番外地」（演出は映画「モテキ」やTV「湯けむりスナイパー」で注目された大根仁）が映像化され、いずれも好評であったので、昨年「まほろ駅前狂騒曲」が再び映画化された。

今回は、行天春彦が三峯凪子との間で子作りのために入籍し、そのために出来た子供の「はるちゃん」を多田啓介が、子供嫌いな行天に内緒で1ヶ月半預かる話と「家庭と健康食品協会」（HHFA）を名乗る怪しげな団体が無農薬野菜を学校給食に採用させようと暗躍し始めたのを、まほろ市のヤクザが無農薬でない証拠をつかむため実業家気取りの星良一（まほろ市を陰で牛耳る裏社会ともつながっている）に頼み、星が便利屋に証拠集めを依頼する話が中心である。映画は無茶苦茶面白かった。多田を演じる瑛太と行天を演じる松田龍平が実にはまり役で、この2人以外の多田と行天のコンビは考えられない。脇を固める真木よう子、高良健吾、本上まなみ、新井浩文、永瀬正敏らもほとんどが前作やTVドラマの時からの常連で皆久しぶりに会う親戚のようだった。

■また会いたい

また3年後くらいでいいから、さらに進化した多田と行天のコンビに会いたいと思う。

「まほろ駅前多田便利軒」（文春文庫）「まほろ駅前番外地」（文春文庫）
「まほろ駅前狂騒曲」（文藝春秋社）「木暮荘物語」（祥伝社文庫）